**自己ＰＲ**　１　野球部　チームワーク　粘り強い

私の強みは粘り強さとチームに良い影響を与える行動力です。 私は大学で野球部に素人として入部しました。母校は全国大会常連の強豪校だったため、「自分のせいでチームの足を引っ張りたくない」という強い気持ちを持ち、授業が忙しくても練習を一度も休まず、合宿にも積極的に参加しました。投球フォームを毎回動画で撮影し、自分で改善を繰り返し、先輩にもアドバイスを求めました。このような姿勢が後輩への刺激となり、チーム全体の~~士気~~練習意識も高まりました。私はリリーフ投手としてベンチ入りし、試合では守備を通じてチームに貢献できるまでに成長しました。この経験を通じて、前向きに努力を継続し、周囲に良い影響を与えながらチーム全体の力を引き出すことができると実感しました。貴社でも、周囲と協力しながら、粘り強く成果を出せる人材として活躍したいと考えています。

**ガクチカ**

私が学生時代に力を入れたことは、インドネシアでの子ども英語学習支援のボランティア活動です。はじめは、現地の子どもたちの生活背景や価値観の違い、さらに言語の壁により、うまくコミュニケーションを取ることができませんでした。そこで、次の2つの点を意識して取り組みました。

1つ目は、チームの仲間と定期的に振り返りを行い、指導方法や現地文化への理解を深めたことです。特に、現地出身のボランティアからの助言は、自分では気づかない視点を与えてくれました。

2つ目は、「教える立場」から「寄り添う立場」に意識を切り替えることです。英語の授業では、ゲームや歌を通じて、子どもたちが楽しみながら自然に学べる環境づくりを心がけました。

その結果、子どもと信頼関係を構築し、効果的な指導内容を考えられるようになりました。参加した子どもたちの授業継続率は初回の60％から85％へと向上し、最終的に30人以上の子どもが1か月以上参加してくれるようになりました。

この経験から、未知の分野であっても積極的に挑戦し、仲間と協力しながら行動することの重要さを実感しました。

**志望動機　Sler系**

私が志望するのはソニーグローバルソリューションズ株式会社です。貴社の「ITを軸に、適応力と変革力でビジネスに貢献する」というビジョンと、常に進化し続けるITを最大限に活用して新たな価値を創造するというミッションに強く共感しました。海外ボランティア活動では、異なる文化や価値観を持つ人々と協力しながら課題を解決し、チームワークと柔軟な対応力の重要性を学びました。また、研究活動ではデータ解析をプログラムで自動化し、効率と正確性を向上させた経験から、IT技術の持つ課題解決力を実感しました。入社後はITスペシャリストを目指し、技術力と適応力を磨きながら、変化する顧客ニーズに応え、社会とビジネスの両面で価値を生み出す人材として貴社のビジョン実現に貢献したいと考えています。

**志望動機　SONY intern**

私は「ユーザー行動データの分析とモデリングを通じて新たな価値を創造する」というビジョンに強く共感し、本インターンシップに応募しました。大学院では、大規模言語モデル（LLMs）を用いた知識グラフ自動構築と品質評価に関する研究に取り組み、自然言語データの解析や関係抽出を通じて、情報の構造化とデータモデリングの重要性を学びました。また、Pythonを用いたデータ分析や可視化、Java・MySQLによるバックエンド開発の経験を通じて、データ処理からシステム設計まで一貫して携わる力を身につけました。これらの経験を活かし、ユーザーの行動データから行動パターンを抽出し、LLMを活用したモデリングやマーケティング分析に貢献したいと考えています。本インターンでは、データサイエンスを実務の中で応用し、ユーザー理解を深めるための分析・アルゴリズム開発のプロセスを体験し、自身の研究をより社会的価値へと発展させたいと考えています。

**短所**

私の短所は心配性なところです。準備や確認に時間をかけすぎる傾向がありました。そのため、最近はチェックリストを導入し、確認項目を明確化。加えて「実行→改善」のサイクルを意識し、スピードを保ちながら慎重に進めるよう努めています。

**日本に留学する理由**

私が日本に留学したのは、データの分析や活用方法を体系(たいけい)的に学びたいと考えたからです。大学では経営学を専攻していましたが、在学中に独学(どくがく)でプログラミングを学び、卒業論文でもデータを扱(あつか)ったことから、データ処理(しょ り)に強い興味を持つようになりました。

その後、日本の大学院ではデータ工学を専門とする研究室があり、データマイニングや機械(き かい)学習(がくしゅう)などの技術を実践(じっせん)的に学べることを知りました。また、日本では医療や製造などの分野でデジタル化が進められており、学んだ知識を活かせる場が多くあると感じました。

このように、興味を深めた分野を専門的に学べる環境と、将来活用(かつよう)できる社会的背景の両方が整(ととの)っていると考えたので、日本に留学しました。

**働きたい理由**

私が日本で働きたいと思ったのは、日本の企業が長期的な人材(じんざい)育成(いくせい)を重視(じゅうし)していることに魅力(みりょく)を感じたからです。

中国では新卒(しんそつ)に即戦力(そくせんりょく)が求められる傾向(けいこう)がありますが、日本の企業では、たとえ文系出身であっても、充実(じゅうじつ)した研修(けんしゅう)制度やキャリア支援のもとで、ゼロからでも学び成長していける環境が整(ととの)っています。

さらに、自分が大学院で学んだ知識や国際(こくさい)的なコミュニケーション能力を、そうした環境の中で活(い)かしながら、社会に貢献していきたいと考えています。

このように、自(みずか)らの能力を高めながらスキルを磨(みが)き、安定した環境の中で長期的に成長し、社会に貢献していきたいと考えたので、日本で働きたいと思います。

**博士／修士論文や授業で力を入れて学んでいるテーマおよびゼミ・研究室での取り組み（応募フォーム用・約930字）**

私が大学院で最も力を入れて取り組んでいるテーマは、「大規模言語モデル（LLMs）を活用した知識グラフ（Knowledge Graph, KG）の自動構築と品質評価」です。テキストデータから有用な知識を抽出し、構造化する技術の研究を通じて、AIによる知識管理の高度化を目指しています。

主に三つの方向から研究を進めています。  
一つ目は、プレーンテキストから主語─述語─目的語トリプルを抽出し、得られたノードやエッジをクラスタリングして冗長性を削減し、より密な知識グラフを生成する手法の開発です。この研究では、新しいベンチマークを構築し、既存の手法を約18％上回る性能を実証しました。  
二つ目は、文章の複雑さ（sentence complexity）に基づくプロンプト設計を導入し、関係抽出の精度を向上させるアプローチです。複雑な文を構文的に分解し、共参照解析を取り入れることで、複数のデータセットにおいて高精度な情報抽出を実現しました。  
三つ目は、「GraphJudger」と呼ばれる評価フレームワークの研究です。これは、LLMを単なる抽出器ではなく、生成された知識グラフの品質を自動的に評価・判断する仕組みとして活用するものです。エンティティ中心のノイズ除去や指示調整、さらにドメイン特化データでの一般化性能を検証しています。

所属研究室では、これらのテーマを基に「LLMsを活用した知識抽出とグラフ評価」に関する実証プロジェクトに参加しています。ゼミ活動では、論文・ウェブ記事などの非構造化テキストを収集・前処理し、プロンプト設計の比較実験や文の複雑性モデリングを行っています。また、GraphJudgerに類似した評価モジュールを試作し、生成された知識グラフの品質を自動的にスコアリングするシステムを構築しました。これにより、データのノイズ、誤関係、重複などのエラー傾向を分析しています。

これらの研究を通じて、データ品質を維持しながら自動的に有用な知識グラフを構築・評価する力を養いました。今後は、研究で培った論理的思考力とデータ分析スキルを活かし、ソニーグローバルソリューションズ株式会社にて、技術と知識を融合させた高品質なソリューションの提供に貢献したいと考えています。

**ゼミ・研究室で取り組んでいる内容（応募フォーム用・約480字）**

私の所属する研究室では、「大規模言語モデル（LLMs）を活用した知識抽出とグラフ評価」に関する実証的な研究を行っています。主な目的は、プレーンテキストから自動的に有用な知識を抽出し、正確で意味的に整合した知識グラフ（Knowledge Graph, KG）を構築することです。

私は、論文やウェブ記事などの非構造化テキストをデータセットとして収集・前処理し、関係抽出モデルの設計と実装を担当しています。特に、LLM（GPT系）を用いたプロンプト設計を比較検討し、few-shotおよびchain-of-thoughtの効果を評価しています。また、文の複雑性（sentence complexity）を考慮したプロンプト最適化にも取り組み、抽出精度の改善を目指しています。

さらに、研究室では「GraphJudger」と呼ばれる評価フレームワークの開発にも挑戦しています。これは、LLM出力の品質を自動的に評価し、ノイズ・誤関係・冗長性などの問題を定量的に測定する仕組みです。これらの研究を通じて、AI技術を用いた知識の構造化と品質管理の両面から、データ活用の新しい可能性を探求しています。